

スティーブン・ボール教授への質問

— 「サービスクラス」とは誰か? —

大田 直子

上田:前半と後半に分け、前半では大田さんのボールさんに対する質問を述べていただき、その後、質問に対するご意見をたまわる。休憩の後、フロアの方々、または大田さんからの再質問なり、あるいは再度のリプライということも含め、フリートーキングを行っていきたい。まず大田さんのプレゼンテーション、20分くらいをお願いします。

大田:都立大学の大田です。本来ならばペーパーを皆さんにお渡しして事前に今日の話についてお伝えできると良かったのだが、こちらの準備もなかなか進まなかったので、直接ということで失礼させていただきたい。ただし、ボール先生には簡単なメモをお渡ししてあるので、私がどういうことを質問するかということはすでにご存知です。

ボール先生の『階級戦略と教育市場』という本があり、この4月から小さな研究会で検討してきた。その成果等を踏まえて、日本の状況を考え、イギリスの状況を考え、そして今回、ボール先生に来ていただいて、いわゆるミドルクラスというものについてターミノロジーを含めてどういうものかお話を伺いたい。もう一つは私が今見ていることが、イギリスから見るとどう見えるのか、あるいは日本の状況を見て、イギリスがこんどは日本から学ぶことがあるのではないかという思いがあるので、それについてお話をしていきたい。

日本では60年代から70年代にかけて多くの人々が自分達は中流階級に属しているという意識に到達したように思われる。高校の進学率は、ほとんど9割、あるいは9割を超え、100%とは言えないまでも、ほとんどみんなが高校に行く時代にもなっていた。学校教育というのはこれは戦前からとってもいいが、日本では将来への投資として、あるいは良い職につけるといことからとても重視されてきたのではないかと思う。とくに、都市部に住んでいる日本人は60年代、70年代にアメリカ流

の生活スタイルをエンジョイするようになって来たと思う。ちょうどその頃であるが、政府の教育政策は経済からの要求というものに教育政策を従属するかたちで発展してきたと思うし、現に日本はずっと右上がりの経済成長を経験してきたと思う。そのような状況がたとえば70年代に行き詰まりを見せていたイギリスなどに教育改革のモデルとしてみなされるようになってきたのだと考えている。

しかしながら、政府の意図通りに教育政策が実施されてきたわけではなかった。たとえば、文部省は60年代後半から後期中等教育の多様化を導入しようとしたが、実際、ふたを開けてみるとごく普通の親達はみんな普通高校を要求していて、職業高校は目的を達成したわけではない。大学進学希望が大きな要因であった。親たちは日常生活の中で大学を出ていないことの不利さを経験してきたのである。大学進学希望者は増加の一途をたどっていったが、日本の高等教育拡大は遅れ、浪人生も増えていったし、不足分は私立大学によって補完される状態となった。他方、日本には学習指導要領が存在しており、大学の入試問題の出題範囲が決められていることから、それに対して準備をするために塾や予備校が発達した。受験は技術といわれ、これは高校教育の対極に存在していた。しかしニーズは大きくビジネスチャンスは広がったのであるが、これはそもそも共通のカリキュラムがあるということに端を発している。平等であろうとした結果、競争が激化することはままあることである。

日本で現在問題となっているのは、とくに最近はお谷剛彦さんたちのグループが明らかにしているように、親の富、所得によって不平等が広がっているということである。もちろんこの主張はむしろ、元々平等ではなかったということを描いた上で、社会上昇移動を最初からあきらめる人々が生まれだしたということをはっきりとすることにあると思われるが、これは角度を変えれば、メリトクラシー的社会的行き詰まりと見ることもできるのではないかと思う。そういった意味でもブレア政権が目指していると思われるメリトクラシー的社会的将来抱え込む問題を日本は今提示しているように思われる（もちろん例外は依然として女性、マイノリティ、障害者という形で存在しているが）。しかしこの点をもう少し見てみると、日本は少し複雑になっている。いわゆる一番優秀な大学は国立大学であるが、そこに至るところで、私立の中高一貫校などが非常にめざましい躍進をしていることである。これはその一方で、それまでは東大にたとえば、何十人も何百人も進学者を排出してきたような都立高校の衰退と平行であった。これは東京都の平等政策のたまもので、いわゆるエリート校をつぶしてきたからである。その間、本来ならば都立高校に進学していたような階層の人々が私立学校を選択するようになった結果である。結局、そういう中等教育機関での公

と私の格差がそのまま反映していくということになったと思う。これは日本の公立学校政策が非常に平等主義的に進んでいた結果、その文部省の統制が比較的緩やかな私立学校でそれと全く違うルートができてしまったと、そういうことなので、一般的に親の受験加熱がこのような不平等をもたらしたというよりは、日本の教育政策のある部分の結果でもあるというふうに見ていくべき必要性があると思う。さらに問題なのは、中等教育のレベルでの格差が大きくなってきてしまったために、受験の準備が小学校段階で始まっていることである。中学校生徒数でみれば、私立学校在学者は全体の6.4%にすぎないが、この集団から多くの一流大学進学者が排出されていることを見ると、多くの親が多少無理してでも私立の中高一貫校を希望するようになっているのだ。

これを見てくると総じて70年代後半までは日本は公立学校が非常に優秀で、すべての人が安心して学べ、その中からエリートを輩出していくという大きな意味を持っていたにもかかわらず、現在では公立学校の水準が下がり、競争力をなくし、益々私立学校志向を強めてしまうという悪循環に陥っている。社会上昇移動を希望する親たちは、公立学校に信頼をおくことが叶わず、財政的に無理しても私立学校を志向せざるをえないのである。もちろん、これに対してはあくまで私立学校がたくさんある東京とか大阪のような大都市の話ではないかという批判が出る。確かに大都市に見られる現象ではあるが、今や私立学校は都市部から地方に向けて進出を進めている。そうなると、地方でも同じような問題が起こると思う。

こうやって考えているときに、徐々にいわゆる「新中間層」の人たちが両極化してきた、分極化してきたということがもう一方で言われているのであるが、益々メリットクラティック的社会になりつつある、あるいはミドルクラスと呼ばれるグループが増大しつつあると思われるイギリスとは、日本が向かう方向はかなり異なるように思われる。つまり私達はもうそこを超えてしまったような気がする。そうなったときに、私達はイギリスの何を批判的に見ていくことができるのか、もはやイギリスから学ぶことができることがあるのか、無いのかという問題もあると思う。

しかし、どういうふうに今のイギリスの教育の現状を見るのが一番、私達から見て正しい形になるのかということを考えて上で、今までの研究を振り返って考えてみると、私はミドルクラスをきちんと対象化してこなかったのではないかと非常に反省している。このミドルクラスという言葉が、私のように出発点がマルクス主義的なバックグラウンドを持っていると、どうしても資本家階級と労働者階級という、あの二大階級として考えやすいのだが、むしろそれをもう少し社会的に中間層という考え方を

する場合、やはり教育に対して一番関心を持ち、一番影響力を持っていた人たちだったのではなかったのか、つまり、繰り返しになるが、教育改革、あるいは政策を考えるにあたって、キーワードはミドルクラスにあったのではないかと思うようになった。

それについてスティーブン・ポール先生にいろいろ聞きたいと、これがもともとの今回の企画の出発点である。自分の中で今までの日本の教育制度のあり方、今後のあり方等々考えていくうちにこういうところにたどり着いたわけなので、皆さんの中からも私の今までの総括に対しても含めてご意見などがあればうかがって、さらに発展させていきたいと思う。

ここからスティーブンポール先生への質問である。一点目が誰がミドルクラスと呼ばれている人たちなのか。そしてまた誰が労働者階級なのかという質問である。バーンシュタインによれば、20世紀後半に二つ目のタイプの新ミドルクラスというのが出てきたとされている。古いミドルクラスはいわゆる産業資本家的なものであって、新しいと呼ばれているのは、いわゆる専門家に象徴される。それでカリキュラムの分析をされたと思う。そういったときに、教育制度、あるいはアカデミックキャリアという考え方をするとやはり、プロフェッショナルの人たちの方がより重要な役割を、あるいは学歴によって自分達の教育を伝えていくことができるということで、非常に教育に関心を持っていたのではないかと、こういうふうに思われる。ポール先生のこの新しい本では、サービスクラスという言葉が出てきている。このサービスクラスというのは誰に当たるのか。このサービスクラスというのは、今までのミドルクラスとどう違うのか。

2点目として、日本の経験からするとミドルクラスが、むしろ、コンプリヘンシブスクール（普通制高校）と、ある種、平等主義的なアイデアを一番サポートしてきたような気がする。あるコメンテーターは、この中間層こそが民主主義のベースというものを供給してきたのだと指摘している。彼らが民主主義のベースだというふうに言われたときに、私の今までの研究態度からすると違和感を感じていたのだが、それについてポール先生はどのように思われるか。

3点目は、そういうふうにもミドルクラスをベースとして考えるならば、ミドルクラスが主張することが民主主義の内実になっているのかどうか、そういうことを考えるべきなのかどうかということについてお伺いしたい。

4番目として、70年代、80年代に日本ではその中間層が公立学校から逃げて行った。それと関連してギデンズが『第3の道』という本の中で、インクルーシブソサイエティという考え方をだしている。それはもちろん、底辺層のインクルーシブとい

うのものがあるのだが、もう一度中間層を公共圏に呼び戻すというこの意識がこの本の中に書かれている。これはアメリカなどでも話題になっているように、ミドルクラスが自分達でお金を出して警察も雇い、医療も買い、学校も作るというように、ますます公共圏から逃げていってる。それだとやはり公共圏にはある意味で教育にあまり関心も持たず、モチベーションも高くない人たちが残ってしまう。これではいくらそこにお金を出しても意味がないので、ミドルクラスをもう一度ここに戻さないといけないうい、こういう意識がこの本にはあったのではないかと、そういう意味では私はこの本を読んでいるのだが、ボール先生はどう思われるか。

第5点として、60年代の後期中等教育の多様化政策というのがある意味で失敗したとうことになると、通常はある教育政策をうまく使って自分達の階級に有利に働くように使っているといわれるミドルクラスなんだが、むしろ政府の思惑とミドルクラスの思惑はそれほど一致しないということのほうが大きいのではないかと。そういうことがあるのではないかとこのように思うのだが、この点はいかがか。

第6点として、もし人々に教育に関心を持ってもらうとか、進学率を高めたいと思うなら、ミドルクラスが持っている価値観なり何なりをむしろ一般化する必要があるのではないかと。たとえば教育の状況をいかに良くするとかというときに、いかに多くのワーキングクラスの親たちを引き付けるかという話もするが、むしろそこでミドルクラスが持っている価値観をワーキングクラスに与えない限りは広がらないのではないかと。そういう感覚があるがそれについてはどう思われるか。

第7点として、いわゆる平等な社会がつくられたとしても、現実には分業体制があるわけであるから、人々をどこかの職業に割り当てなければいけない。それは今、学校制度がある程度その役割を果たしていると考えている。ということであれば、どこかで人々を選別するそういう役割を学校制度は引き受けているのではないかと。それを批判するのではなく、どういう振り分け制度なら、あるいはどういう不平等なら私達は受け入れて、どういう不平等なら許されないというふうに考えるほうがいいのであって、不平等一般を悪いというふうに言い切ってしまうのではならん解決にはならないのではないかと。この最後の問題というのは、今までの問題とはレベルが違うと思うが、いろんな問題がいつも不平等が拡大するとそれだけでも批判されたり、あるいは商品化という言葉が不平等をもたらすからといって批判されたりとか、単純に不平等イコール悪論が頻繁に使われているような気がしているからである。不平等というのはある程度必然性があると私は考えているし、ある種の不平等は多様性の源でもあり、発展の起爆剤になっていると考えているので、どのような不平等が悪くて、ある

いはどの程度なら許されて、こっからは認めないという、こういうふうな論の立て方のほうがむしろ今後の教育政策を論じる上でいいのではないかと考えているので、この点についてボール先生はどう考えておられるかというのを聞きたい。どうもまとまりがなく、羅列的で申し訳ないけれども、日頃思っている質問をすべてはき出させていただきました。

ボール: どうもありがとうございました。大田先生は非常に興味深く、難しい問いを投げかけてくださったが、真剣に受け止めてもらえるというのはいつも喜びであるので、これからお答えしたいと思う。

ではまず、イングランドでミドルクラスは誰なのかということであるが、少しわかりやすくするために、黒板に絵を描きたいと思う。

大田先生が先ほど言及しておられた本の中で、私はジョン・ゴールドソープ (John Goldthorpe) のサービスクラスという考え方を紹介している。サービスクラスというのはミドルクラスの一部にあたるわけだが、中間ミドルクラス (intermediate middle class) と言われる人々は除外している。この中間ミドルクラスというのはどういうグループかということ、ホワイトカラー労働者であるが、グループでルーティーンワークをこなしているような、事務あるいは秘書といった職業の人たちで、他者が決めたことに服従しながら仕事をするスタイルで働いているミドルクラスのことである。私達はサービスクラスというひとつの部分に着目し始めているのだが、合衆国であれイギリスであれ、ひとつのディヴィジョン、枠組みの中にさらに細分化されたグループが見出されるようになってきている。サービスクラスの中のさらに細分化されたこの部分 (Class fraction) に着目することによって大田先生が投げかけておられる他の問いにもお答えすることが出来ると思う。

このサービスクラスの中にある部分に着目する際に、3種類のことに気づくことになる。それは、構造的違い (Structural differences)、規範的違い (Normative differences)、関係性における違い (relational differences) である。構造的違いというのは職業の違いである。規範的違いというのは価値、信念、ライフスタイルに関わる違いである。それから関係性の違いというのは社会的なネットワークや友情関係をどういうふうに結んでいるかということに関するものである。しっかりと形成された断片、フラクションというものを特定化するには、この3つの種類における違いというものが見出されるときに、しっかりとしたフラクション (派) が形成されているといえる。イギリスではマイケル・サベージ (Michael Savage) とかティム・バト